前

令和三年度入学者選抜　一般選抜　試験問題

試験科目　国語

試験開始	12：30	
試験終了	外国語学部 看護学部	13：30
	日本文化学部 教育福祉学部	14：00

【受験上の注意】

一　用紙は、すべて試験開始の合図があるまで開かないこと。

二　試験開始後、ただちに次のことについて、よく確かめること。

ア．乱丁、落丁のある場合は、試験開始後速やかに手を挙げ、監督者に知らせること。

イ．問題用紙は、全部で十一ページである。

ウ．解答用紙は、外国語学部・看護学部が一枚、日本文化学部・教育福祉学部が三枚である。

三　解答用紙の氏名欄・受験番号欄は必ず記入すること。

四　解答は、所定の欄内にはっきりと記入し、欄外には記入しないこと。

五　問題用紙の余白は、メモ又は下書に利用してよい。

六　問題用紙は、持ち帰ること。

外国語学部・看護学部の受験者は一のみを解答すること。
日本文化学部・教育福祉学部の受験者はすべて解答すること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、文章は問題文とするにあたって、原文を一部改めたところがある。

まず詩人と詩について考えてみる。詩の根幹にはリズムがある。リズムは心地よい拍動となって生理的、身体的に作用を及ぼす。その後、言葉のもつ意味が作用してくる。詩人は既存の意味からいかに離れるか試みる。遠く隔たった言葉同士を結びつけ、新たな意が発生するよう仕向ける。例えば木と天体、本と食べ物をつなげ、隠喩でもってイメージを具現化する。さらに詩人は既存の言葉に飽き足りず、違和感を覚える。その語の響きが意味にそぐわない、ふさわしくないと感じるのだ。別の語でその意をもたせたり、極端な場合、独自の言葉を創出したりする。

中原中也は鋭い感覚と洞察で、既存の言葉からいかに乖離するか悪戦苦闘した。中也は「芸術論覚え書」のなかで「芸術といふのは名辞以前の世界の作業で」あるといいきる。「『これが手だ』と、『手』といふ名辞を口にする前に感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい」という。つまり「手」という名辞を発する以前に感じる手そのもの、そのような次元に芸術は属し、そこからしか詩は生まれないと述べる。これは重要な発言だと思う。つまり詩は名辞以前に属すると述べているからだ。中也のいう名辞は名詞を、さらにはそれがもたらす概念と考えられるが、言葉そのものとも解釈できる。詩は言葉でありながら言葉以前の世界のものであるという。これをどのように理解すればよいだろうか。

ひとつ考えられるのは言葉には二種類あるということだ。一般的に使われるコミュニケーションの道具としての言葉は名辞であるといえる。全体から部分を分割し、名指し、相手に概念を伝えるはたらきをもつ日常の言葉である。中也はこのような言葉以前に別の言葉があったと考えたのではないか。すなわち詩の素材となる言葉が別に存在するのである。それは概念を提示することなく未分化な、ある種の実感をいだかせる言葉である。このような言葉は具体的な何かを名指すわけではない。「手」が「手」である実感をもたらす、「手」が「手」として分割される以前の全体性を取り戻す言葉、あえていえば「手」を名のない状態に戻す言葉である。はたしてこのような言葉は存在するのだろうか。さらに考察してみる。

名辞以前の言葉とは、おそらく響きではないだろうか。言葉は音であり、音はそれぞれ傾向がある。温かい音や澄んだ音、鋭

い音や乾いた音等、性格をもっている。これら音により感情や、さらにはかたちまでも想起させることができるのではないか。いわば名辞のもととなる言葉である。このような音の性質は動物の鳴き声にも共通している。私たちは鳥や獣の鳴き声が(イ)イカクしているのか、仲間を呼んでいるのかある程度わかる。中也はいわばこの「根」に近い言葉によって詩を書けといっているのではないか。それは言葉の野性を取り戻す行為でもある。中也はそれをオノマトペによって克服していったと思われる。あるいは具体的な言葉にせず、「言葉なき歌」などにみられるように指示代名詞に留める場合もある。さらには視覚的な表現(「曇天」の「黒い旗」など)によって提示した。この、視覚的な表現への転換、ここに詩人が絵を描くきっかけがあると思われる。つまり絵は名辞以前のものを表現するにはうってつけなのだ。具体的に手を描かずとも手の実感を色彩や線で表現できるのである。これは響きによる詩作よりも自在性が高い。(中略)

一方、画家はいかなるときに詩を書くのか。絵を描くにはある程度の修練と技術を要する。手間がかかるのである。瞬時にして到来したイメージを留めるには言葉が有効にはたらく。言葉は対象をわずか数音節で表現できる。また、絵にし難いものを言葉に託すこともできる。例えば「世界」や「宇宙」といった対象を描くのは並大抵ではない。言葉は共通の理解の上に成立しており、便利なのである。この便利さにより、画家は手近なものとして詩を書いた節(ロ)もある。生活で感じたことを何の気なしに直截に表現するには、絵よりも手順を経ない詩の方がふさわしい。また、自分の方針を確認し、鼓舞するためにも詩を綴っている。言葉に出して確認するのである。そのような詩には絵にはなりきれなかった、また絵にすることが憚られた画家の本音が吐露されたものもある。肩肘張らず、ふと出た言葉の素直さと初々しさが感じられるが、なかには切迫したモチベーションのもと詩作に向かった画家もいる。そのことを次に述べたい。

画家が自然を対象とする場合、最大の師は自然そのものであり、言葉を失わなければその懐に入れない。言葉は自然との距離を保つはたらきがあるからだ。一方、絵の具はものの世界に属し、画家が求める色やかたちは自然との親密の度合いが強い。画家は言葉のない「もの」の領域に深く分け入っていく。そこで画家はさらに自然に近づきその造形の秘密に迫り、自然に代わって創造したいという想いに駆られる。それは自然をまねぶ行為である。しかし、自然に近づけば近づくほど冥く深い裂け目が現れ

る。制御しきれぬ大きな存在に呑み込まれる畏れが生じる。そこではすべての名は失われ、画家自身のリンカクも保てなくなる。これこそ、ほかならぬ名辞以前の世界なのである。深淵に踏み込んだとき、たよりになるのが言葉である。言葉により対象を把握し、距離を保つのである。名のない状態、あるいは名指すことができない状態のただなかで名が求められ、言葉が呼び出される。このような言葉は畢竟、詩にならざるを得ない。なぜならばかつて一度も名をもたなかったものの名であるからだ。ここに詩のもつ大きな役目が示される。それは名のないものに名を与え、その出現を促すはたらきである。名が与えられたことにより、それは初めて対象として認識されるのだ。こうしてみると詩作は、①名のあるものを名のない状態に戻し、名のないものに名を与える作業であることがわかる。どちらも名辞以前の世界と深くつながっている。つまり、そのものと出会った最初の発語に迫る作業なのである。（中略）

逆に言葉をものの世界に据えようとした作家として飯田善國がいる。飯田は「人間は事物に名を与えたことによって事物との距離を正確に測定し得た代償に事物から疎外されてしまった」と述べる。神という統合原理やそれ以前のアニミズムは、人間が疎外されずに自然とつながるための手立てであった。しかし、すっかりこれら二つが破壊されてしまった現代にあって何が残っているのか、飯田は言葉が残っているとした。言葉によって生じた距離を言葉によって再統合するのである。これは一見矛盾していると思われるが、先に述べた名辞以前の言葉を思い起こしてほしい。飯田は明らかに名辞以前の言葉を意識している。それを絵画により呼び戻そうとした。これが実現すれば言葉なきものの世界に新たな言葉の系が拓かれたことになる。飯田は日本語をアルファベットに置き換え、外国語と共通の音を色の帯でつなげた。例えばＬＯＶＥとＫＯＩはＯが共通している。名指されるものの実体が同一の音によって変換されているのではないかと彼は想像した。またＫＯＩとＡＩという日本語同士にも注目した。両者はＩでつながっていることを発見し、「恋」と「愛」が地続きであることを確認する。

さらに飯田は音を任意の色の帯でつなげた。Ｏは飯田にとって紫であり、Ｉは黄色であった。ここで色彩が出てきたことは注目に値する。なぜならＯとかＩといった「名」の音素が、光という自然の要素に還元されているからだ。実体は色＝光を伴っているのである。飯田は名辞をたよりに本源へ遡行し、名辞以前の言葉に辿り着こうとした。本源的な言葉により再統合を試みてい

るのだ。それを可能とするのは詩的想像力である。飯田はものの世界において、いかに言葉が存在しうるか、また存在しうるのはいかなる言葉なのか確かめ、作品として実践した。色の帯は分断された世界を再統合する光の絆であった。それが彼のもとめた言葉であり、そのはたらきであった。②「うしなわれないことば」という作品タイトル自体、「もの」の世界においても「うしなわれない」言葉の存在を想起させ、意味深長である。

以上、詩人の絵と画家の詩を見てきたが、それぞれさらなる深化を目指す上で絵と詩が援用されたことがわかる。今後、詩と絵の関わりはどうなっていくのだろうか。おそらく双方はその限界を突き詰めていくことだろう。つまり詩は絵に、絵は言葉の領域へと接近する。飯田の《うしなわれないことば》は具体詩と見なせるものであり、具体詩は視覚芸術の要素を多分に孕んでいる。今や言葉の「もの」化と「もの」の言葉化という局面を迎えている。そこで改めて問われるのは「情」の部分だろう。ややもすれば、感性のみ先鋭化され、③情がなおざりにされるうらみがある。ここで「もののあはれ」という言葉を想い起こすのも無駄ではないだろう。「もののあはれ」の「もの」とは、事象を含んだ対象を指すと思われるが、ここで注意しなければならないことは「もの」を「あはれ」と思う情がまずあるということだ。それを強く感じるか否か、感性の問題が後からやってくる。情があくまで「根」にあること、これは大事なことだと思う。

（江尻潔「根源世界のほとりで」『画家の詩、詩人の絵　絵は詩のごとく、詩は絵のごとく』二〇一五年十月、青幻舎より）

（注）

アニミズム…あらゆるものに霊魂が宿るという考え方。

具体詩…コンクリート・ポエトリー。一九五〇年代に起こった、文字の物質性に注目し、詩における視覚的表現の可能性を探究しようとした運動、および作品。

感性…この文脈における「感性」は、芸術における「方法」と捉える。

問一　傍線部㋑～㋩の、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めよ。

問二　筆者が「名辞以前の言葉」と捉えているものは何か。本文中の言葉二字で答えよ。

問三　詩人が「名辞以前の言葉」によって表現したいものは何か。本文中の漢字二字で答えよ。

問四　傍線部①の内容を五〇字以内で具体的に説明せよ。

問五　傍線部②で「意味深長」とされる理由を七〇字以内で説明せよ。

問六　傍線部③のように考えられている理由を一〇〇字以内で説明せよ。

二　内大臣（文中では「大臣」「殿」）は、母大宮（文中では「宮」）のもとに預けていた娘（雲居雁）を東宮妃にしようと望んでいたが、娘が恋をしているという噂を聞き、怒り慌てて自邸に引き取る決意をする。本文は、夕霧（文中では「冠者の君」「男君」）と雲居雁が大宮邸にいるところに、内大臣が迎えに来る場面である。以上を踏まえ、次の文章を読み、後の問いに答えよ。なお、設問にあたり一部表記を変えた部分がある。

冠者の君、物の背後に入りゐて見たまふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつつおはするけしきを、御乳母（注1）いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりて、夕まぐれの人のまよひに、対面せさせたまへり。

Ⓐ<u>かたみにもの恥づかしく胸つぶれて、ものも言はで泣きたまふ。</u>「大臣の御心のいとつらければ、さばれ（注2）、思ひやみなんと思へど、恋しうおはせむこそわりなかるべけれ。Ⓑ<u>などて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よそに隔てつらむ</u>」とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、「まろも、さ［　X　］はあらめ」とのたまふ。①<u>「恋しとは思しなんや」とのたまへば、すこしうなづきたまふさまも幼げなり。</u>

御殿油まゐり、殿まかでたまふけはひ、こちたく追ひののしる御前駆の声に、人々、「そそや（注3）」など怖ぢ騒げば、いと恐ろしと思してわななきたまふ。さも騒がればと、ひたぶる心に、ゆるしきこえたまはず。御乳母（注4）参りてもとめたてまつるに、けしきを見て、「あな心づきなや。げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」と思ふにいとつらく、「いでや、うかりける世かな。殿の思しのたまふことはさらにも聞こえず、大納言（注5）殿にもいかに聞かせたまはん。めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞こゆ。ただこの屏風の背後に尋ね来て、嘆くなりけり。男君、我をば位なしとてはしたなむるなりけり、と思すに、世の中恨めしければ、②<u>あはれ</u>もすこしさむる心地して、めざまし。「かれ聞きたまへ、

③<u>くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみどりにやいひしをるべき</u>（注6）（注7）

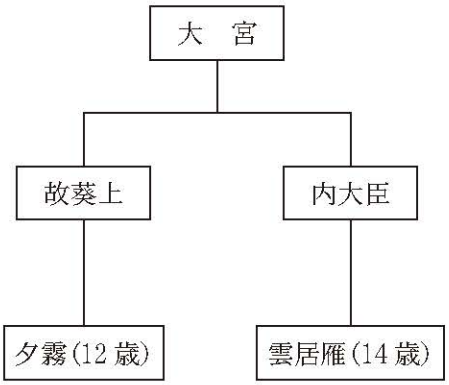
恥づかし」とのたまへば、

いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ

とものたまひはてぬに、殿入りたまへば、Ⓒ＿＿＿＿わりなくて渡りたまひぬ。

男君は、立ちとまりたる心地も、いとⒹ＿＿＿＿人わるく胸塞がりて、わが御方に臥したまひぬ。御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、静心なければ、宮の御前より「参りたまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。涙のみとまらねば、嘆きあかして、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ。

（『源氏物語』より）



（注）

1　御乳母…夕霧の乳母。

2　さばれ…「さばれ」は「さはあれ」。雲居雁を移すなら移すがよい、の意。

3　そそや…それ大変、お帰りだ。

4　御乳母…雲居雁の乳母。

5　大納言殿…雲居雁の母が後に再婚した相手。母が再婚したため、内大臣の子である雲居雁は、継父の元ではなく、内大臣の母である大宮のところに預けられ育てられた。

6　あさみどり…浅葱色で、六位である夕霧の袍の色。なお、紅は五位の袍の色。

7　いひしをる…悪く言う。けなす。

問一　傍線部Ⓐ、Ⓑ、Ⓒ、Ⓓの意味を記せ。

問二　空欄 X に入る助詞を答えよ。

問三　傍線部①について、発話者が誰であるかを答えよ。

問四　傍線部②は、誰の、誰に対する、どのような気持ちなのか、答えよ。

問五　傍線部③の歌を、歌に込められた詠者の気持ちがわかるように、現代語訳せよ。

問六　この文章には、二人の「乳母」が登場する。それぞれの乳母の夕霧に対する態度を百字以内で説明せよ。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた部分がある。

余媚娘、才婦也。本良家子、適周氏、夫亡。時年十九。以介潔自守、誓不再嫁。陸希声時為正郎、聞其容美而善書、使①行人中善言者〈X〉遊説之。媚娘曰、「陸郎中若②欲児侍巾櫛、当須立誓。③不置側室及女奴、則可為婦。」陸諾之。既娶二年、劈牋沫墨、更唱迭和、動盈巻軸。④媚娘又能饌玉色鱠、妙不可及。無何、陸又獲名妓柳蕣英者。姿色姝麗、逾於媚娘。媚娘怨之、諭令入宇同処。陸Ⓑ以為誠然。既共居、媚娘略無他説。候陸他出、即召蕣英閉私室中、⑤手刃殺之。

（『緑窓新話』より）

（注）

正郎…郎中（中央官庁の官職）のこと。

行人…使者。

児侍巾櫛…妻のこと。

劈牋（へきせん）沫墨、更唱迭和、動盈巻軸…紙や墨が散らばり、贈りあった詩が部屋中に溢れている。

饌…料理を作る。

玉色鱠…料理名。「鱠」はなます（細切りの生魚に調味料を合えたもの）のこと。

姝麗…美麗。

宇…家。

無他説…人（ここでは柳蕣英）と話をしない。

他出…地方へ赴任する。

問一　傍線部ⒶⒷの読みを送り仮名も含めてひらがなで記せ。

問二　傍線部①について後の問いに答えよ。

（一）　空欄〈　X　〉に入る送り仮名を記せ。

（二）　「之」は誰か。次のア～オから一つ選び記号で答えよ。

ア　余媚娘　　イ　夫　　ウ　陸希声　　エ　行人　　オ　柳蕣英

問三　傍線部②の全体をひらがなで書き下せ。

問四　傍線部③に返り点をつけよ。

問五　傍線部④を現代語訳せよ。

問六　傍線部⑤に至った経緯について、本文全体を踏まえて七〇字以内で説明せよ。